

京町萌香

*On the Day  
When I Listened  
Neil Sedaka*

# 京町萌香

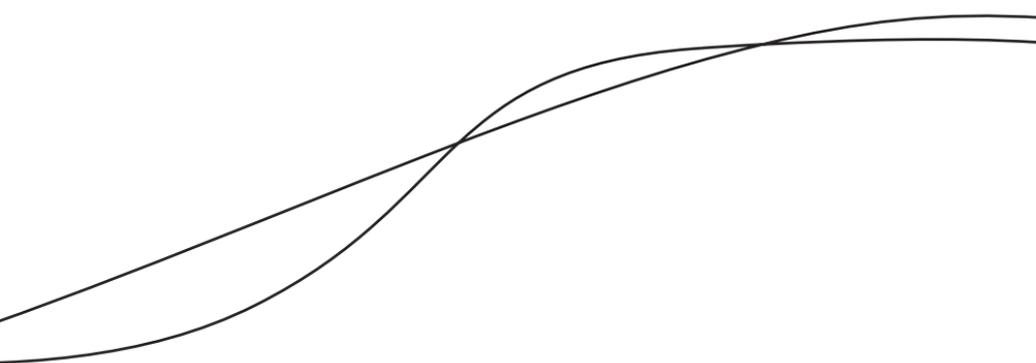
*Kyoumachi Mooka*



# 目次

## CONTENTS

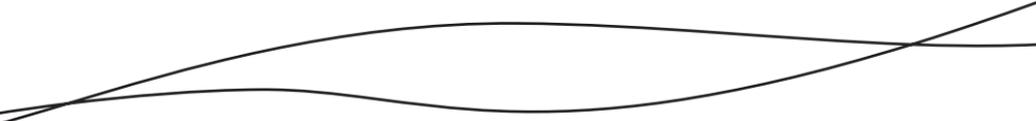
ニール・セダカを聞いた日に	6
バート酒向(さこう)との出会い	10
原宿あたりでー	14
原宿あたりでⅡ	17
五月の雨上りの日に	20
ただなんとなく	26
パークハイアット東京にて	32
ジェットストリーム	36
「ボクの指は六本あるの……」	39
さよならはマライアの曲にのせて	43
夏の終わりに	47
バリのビーチで	51
さよならをする日まで(ボエム)	55
癒しの時	59
ワンスの会話と胸の内	63
レオンとマミーさんの会話	66
ボエム	70
「男と女」ー	75



「男と女」 Ⅱ

ピアスをあけた日	82
アメリカのドラマ	86
寒い日のすごしかた	91
生きていくための10の約束	95
六月とケイコ・リー	99
美味しいクッキング	102
サークルE.T.Mの楽しさ	106
レオンとアレルギーと食事	111
車とデート	115
ふと涙がこぼれる時	118
迷える心	122
最近英語が楽しいわけ	126
金魚草	131
久しぶりのキス	134
再びニール・セダカを聞いた日に	139
あとがき	142

*On the Day  
When I Listened to  
Neil Sedaka*



ニール・セダカを聞いた日に

## 二一儿・セダ力を聞いた日に

あの曲を初めて聞いたのは、確か小学校一年の頃だと思う。今の様にカセットテープだのCDなどまだ普及していない頃だったので、もっぱらドーナツ盤の45回転のレコードを家庭にある茶色の電蓄で聞いていたものだった。あの頃の写真を見るとおかつぱ頭に白いセーター、少しギャザーの入ったスカート姿で得意な顔をして電蓄の前に立っているのを目にする。寒くても決してタイツをはいて学校へは行かなかった。あの頃のタイツはなんとも言えないベージュ色で、今とは違い、とにかくフィットしないのである。朝その気でたくし上げてはいて出ても、しばらくすると、どのあたりからか、ズズーとたるんでくるのである。その頃友だち数人と並んでとった写真を再び見ると、他の三人は確かにヒザのあたりがシワというより大きなズズーが集まって、私としては、子供なりにそれがカッコワルイと思っていたのである。とい

うわけで、少々寒くても、(まっ子供は風の子と言いますので)一年中短いソックスで学校生活をすごしたというわけです。とにかく本当に風邪なんてひいたことがないと言ってもウソではない位に、健康で素肌を寒風にさらしていたのです。我が家もその点は過保護でなかったので薬らしい薬もほとんど飲んだことはなかった。

そうそう、そのレコードはいとこからもらった物で、本当にそれが初めて聞いたポピュラーだったかもしれない。私にはなんとこんな風に聞こえていたのを覚えている。

チユーチユートレイン

チャグナム トレイン

ゴナラベローン ネバカミバック

ウーウーウー

ガルワンウエイ ティケッツダブルー……

なんだかこれだけ見るとわけがわからないが、子供心にはそう聞こえていた。なんだかチユーインガムでもかみながら、ウーウーうなっている感じで、いわゆる曲の詩というより、耳から聞いた感じでした。かかったので、今思うと、それなりにかなり子供心にはインパクトが強かった。でもなんとなくテンポがブ

ルース調で、（それは後にわかったのだが）ちょっといい感じと言う気がしていた。それがニール・セダカの『恋の片道切符』だったのである。『恋の片道切符』なんて、よくよく今考えると悲しいが、誰でも一度は、夢中な恋をし、片道切符で自動改札（こうなると、もう現実的で夢も希望もない感じですが）を通り抜け、そのはかなさに気づかず、恋の道のりをつつ走る頃があったと思う。子供にはそんな恋心なんてわかるわけではないので、FM東京から、先日この曲が流れてきた時には、なんとも言えないつかしさがこみあげてきたものだった。

『恋の片道切符』のB面には、ぐっとA面とは感じの違うバラード調の『お、キャロル』が入っていた。またこれもなかなかだった。イントロの「ウーウー……」のはじまりがよかった。実際にはA面がヒットしていたけれど、けっこうヒットの裏のB面の方が良い曲という事が多いものだ。これも本人の好みだが、私はバラード調の方がスキなので、今ならこちらがおすすめかもしれない。つれない恋人に、熱烈な恋心を訴えて、ひしひしと歌いあげたこの美しい曲を三十年ぶりに手にすると、（このレコードは経堂の実家の母がきちんと保管してしてくれたのです）何か歴史とまではいかないけれど時の流れを感じないわけはいかなかった。実家に帰った時に、母に「ニール・セダカの昔のレコード家にあつたでしょ？ちよっと見せてくれる？」と聞くと、母はステレオの横の戸棚の中から、積み重なったEP盤の中からそれを見つけてくれた。たくさんのなつかしいレコードが昔のまままでその戸棚の中にきちんと収まっていた。

母は、すべてきちんとしている性格なので、私や家族が大事にしていたレコードは、丁寧に保存してい

てくれた様だった。母が見つけてくれたそれを手にして、

「これこれ。なつかしいわねえー。この歌詞カード借りていくわね」

と言うと、

「あとでちゃんと返しなさいよ。古いこういった物は、価値があるんだから……今探そうと思ったってきつとないわよ」

と、きっぱり言われた。まさか私が、のちに「ニール・セダカを聞いた日に」なんて本を書いて出版するなんて、思ってもいなかっただろうけれど、とにかく歌詞も、もう一度見たかったし、その積み重なったレコードを目にし、なんとなくなつかしい思いにひたり、そっと大事に汚さないように歌詞カードをしまった。

## バート酒向（さこう）との出会い

あれは私が中学三年生の時だっただろうか。我が中学校へ一人の教育実習生の先生がやってきたのである。公立中にはたいてい二週間位滞在して専門の教科を教えるのだが、彼は英語担当の教師だった。立教大生で背はやや低め、笑うとなぜか前歯ばかり目立つという感じで、それがまたほどよく良い印象で好感がもてた。まあ公立中の英語の授業といえ、その頃発音は決して良いというわけではない女教師が教えていたので、はつきり言えば面白くなく、はりあいもなく、これで世界に通用する英語の力がつくものなのかという、いわば疑問の日々だったので、たまに新しい若い男性教師が現われると皆一応に気分がわき立ったものだった。授業もユーモアたっぷりのゼスチュア入りで楽しく進んでいたし、発音もけっこうなものだった。いつも下向きかげんの生徒が多かった授業も、一気に生徒の気をひき、皆笑い合って楽し

い授業の展開となった。本来はこうあるべきなのだ。

しかし、しかし、楽しかった思い出は、英語の授業だけではなかったのである。それは放課後であったのだ。と言うのは、彼はギター持参で教育実習に来ていたのだった。驚きである。「放課後の教師の秘密」なんて言うと、今どきの女子高の間ではやりそうな響きだが、昔、そうですね、今から三十年位前の中学校ではまだまだ教師と生徒との間はきっちりとしたものがあり、今ほど荒れてはいない学校生活だったのである。酒向先生は、私たちが放課後のやりたくもない教室の掃除を早めにきり上げて帰ろうとしていた所へ、なんとフォークギター片手に現われ、「ヤアー君達！」と、なんだかこれから何が始まるのかしらと内心思ったが、まさかギター片手に渡り鳥の小林旭という雰囲気ではないという事はあの時悟った。何か新しい音楽が始まるのかしら……と内心ワクワクしていた。

「どおー一緒にみんな歌おうよ……！」

と、NHKの歌のお兄さんではないんだから……。

私のはあの頃音楽と言えば、ウィーン少年合唱団に夢中で、学校から帰ると応接間でLPに聞きほれていたのだ。メンバーの子をマークして、それも舌がもつれちゃう様な名前の子が多く、写真を切り抜いてはノートにはりつけたりしていた。それもかつては幼少の頃、親に連れられて観に行った名画『野ばら』の印象が強かったのである。あの映画の主人公のミハエル・アンデがすごく印象に残っていた。音楽物の映画と言えば『未完成交響曲』もよかったし、後に観た『サウンド・オブ・ミュージック』は計三回観たも